

続日数が長い外は、一般的傾向として、各月とも平場は一番長く、次に沿岸部であり、内陸に行くにしたがい短くなる。

いま多照日の継続日数の最大値の出現月の地理分布を調べてみると、高田周辺、西蒲、岩船平場は6月、頸城山間部は5月、魚沼高冷地、上越沿岸部は7月の外の地域は8月に最大値が出現し、西蒲、中西頸城は8月、中下越地方は7月、頸城山沿、魚沼山間平野部は6月、魚沼高冷地は4月に第2位の最大値が出現し、10.1時間以上の日の継続日数の最大値の出現月を調べてみると、多照日の最大値の出現月と異なるのは、魚沼山間平野部、岩船、西蒲、頸城山間部、魚沼高冷地は6月、西頸沿岸部は8月、古志平場は9月に最大値が出現し、頸城山間部、魚沼高冷地は5月、小千谷、新潟周辺は6月、頸城地方、魚沼山間平野部は7月、西蒲平場は10月に第2位

の最大値が出現することであり、最小値の出現月は両者とも土地により出現月が若干異なるがいずれも冬期である。

前述せし結果によると、例えば寡照日、多照日等の出現率の多い時期であり、日照時間の合計が比較的(多)の時期であるのに立地条件によって多照日、寡照日が継続するきがい比較的が多いことが知られ、前報までの月別、旬別解析によって知られた各地の概略的な特性が一層判然として来たことである。この様なことは、前述の月別、旬別日照時間の累年平均値等だけからでは、この様な特性をうかがうことは出来ないと共に、局地の特性を考慮し、持続性、地域差、代表性等を計算し、局地予報の一方法については後述するが、この様な特性を留意の上、局地予報の解析を行なったら量的予報も可能になるのでなかろうかと思うのである。

理 事 会 だ よ り

第2回常任理事会議事録

日 時 昭和39年7月13日(月) 17.30~21.00

場 所 神田学士会館

出席者 正野、桜庭、北岡、今井、大田、荒井、増田、
吉野、神山、小平、須田、神保、各理事
高橋(喜)、内田 各委員(順序不同)

決 議

1. 国際雲物理会議の組織委員中鯉沼、吉武、淵の3氏の代りに大谷、桜庭、北岡の3氏で補い、新たに小平(理事)、大森(気象庁次長)、伊東(総務部長)、渡辺(気象研総務部長)、神原(札幌台長)、藤井(名古屋台長)、岡田(気象協会理事)の諸氏を加える。また学術会議からも代表に入ってもらよう交渉する。
2. 各常任理事の任務分担及び各委員は別紙の通り(276頁参照)お願いする。依頼状は本人及び所属長に出し、解任された前期委員にも感謝状を出す。
3. 辞任された前期役員(常任理事、監事)に1,000円位の記念品を出す。

4. 第13期の評議員候補として次の13名を常任理事会としては推薦し、この中から全国理事の投票で10名を選出する。

磯野、大谷、岡田、日下部、柴田、和達、吉武、神原、川瀬、川畑、山岡、倉石、武田。

5. 秋季大会を総会とし11月18、19、20日の3日間福岡市天神ビルにて開催する。大会委員長に荒川秀俊氏をお願いする。シンポジウムは支部の提案通り「レーダー」とする。総会費用として10万円を支部に交付する。今井理事九州出張の際下検分を依頼する。
6. 長期計画委員会について
起草委員に都田、山元、松本、増田4氏を選び、7月30、31、8月1日の2泊3日湯ヶ島で原案の起草を依頼する。学会では2人分の旅費を支出する。
7. HAO から依頼のあつた天文辞典の原稿については外国委員でまとめることになった。

(264頁に続く)